

# 関門オペラ

作 .. 田坂哲郎

あらずじ

独裁者だった平清盛の死後、三男宗盛は総大将として平家の立て直しをはじめ。しかし、命を大事にしたい宗盛の言動は、イクサビトのプライドを重んじる一族たちの目には卑怯で貧弱に映る。

そんな中、源頼朝の挙兵を受けて、信濃から木曾義仲が都へと攻めてくる。義仲との戦いに敗れ、都落ちを余儀なくされる平家一行。一方、都でやりたい放題の義仲は源氏の総大将である源頼朝の怒りを買って、その弟、源義経によって討たれてしまう。義経は宗盛とは打って変わってイクサ好き。危険で命知らずな戦術を繰り返しながら、平家一行をさらに追い詰めていく。逃避行のなかでも一族の絆はゆるがないように見えたが、一の谷の合戦で宗盛の弟、重衡が義経に生け捕りにされ、平家が持っている三種の神器との交換を要求された際、宗盛が要求を拒否する決定を下したことで、決裂がはじまっていく。

そして、最終決戦、壇之浦。信じていた家臣、あわじいの裏切りによって、平家の敗北は決定的となる。三種の神器も海に沈み、次々に仲間たちが海に落ちていく中、宗盛だけは一人死ねないでいる。「のちの評価のため」「そういうものだから」そんな理由では死ねないと船にしがみつく宗盛だったが、ついに海に落とされてしまう。しかし、必死の思いで海から這い上がり、義経によって処刑されることとなる。

しかし、義経もまた、三種の神器を奪還できなかったことで兄である頼朝の怒りを買う、宗盛の処刑後は自分が殺されることを知る。そのときはじめて義経は、宗盛の「生恥さらしても生きたい」思いに手が届く。二人が生きたいと願ったとき、突然宗盛の恩赦と、義経の逃亡が発表される。困惑の中、物語はなかば強引にハッピーエンドへと着地する。

☆

京の都。宗盛邸宅。

平清盛の三男、宗盛が、琵琶法師たちを前に話している。

宗盛

えーと……、お集まりいただきましてありがとうございます。琵琶法師のみなさん。実は、ちよつとお願いがありました。

琵琶法師

ベンベンベンベン……（なんですか？ 詳しく！）

宗盛

私の父、平清盛が先日永眠いたしました。私、平宗盛が、平家の総大将として父の後を継ぐことになりました。

琵琶法師

ベンベンベンベン……（おめでとうございます）

宗盛

ありがとうございます。ご存知の通り、父、清盛は良くも悪くも、平家一族が栄えるためには手段を選ばない、そんな人でした。おかげで、今の平家の地位があるわけです。

琵琶法師

ベンベンベンベン……（うらやましい、さすが清盛）

宗盛

父のおかげで平家は栄えましたが、その結果、多くの方の反感を買っていることも分かっています。誰とは言いませんが、平家の一人が、NO平家NOヒューマン、平家でなければ人ではないという発言をして、大炎上したこともありました。

琵琶法師

ベンベンベンベン……（平家ひどい！ おもいあがりだ！）

宗盛

だからこそ！ だからこそ！ ここからがお願いなんです。平家の評判がちよつとでも良くなるような、そんな物語を、琵琶法師の皆さんに語っていただけませんか……

琵琶法師

ベンベンベンベン……（ただでというわけにはいかない）

宗盛

もちろん！ もちろんギャラははずませていただきます。お金ならまあまああるので。

琵琶法師

ベンベン……（我々マスコミを利用するのか）

宗盛

いやこれ別に、嘘をつけと言っているのではないんです。しかし、物語と言うものは、視点を変えれば、解釈も変わるものでしょう？

琵琶法師

ベンベンベンベン……（たとえば？）

宗盛

たとえば……そう、清盛は、意外とイクメンだったとか、なんでもいいんです。とにかく、印象を良くしたい。平家は、これまでのワンマン体制から、変わろうとしているんです。どうか、力を貸してください！

琵琶法師

ベンベンベンベン……（フラッシュ）

宗盛、頭を下げる。フラッシュが焚かれるようにベンベン言われる。

そこに、知盛と重衡が鳥羽殿から帰ってくる。

琵琶法師

ベンベンベンベン……（お話を伺わせてください！）

知盛

むねちゃん、今日はなんの会見だ？

宗盛　　まずいとところに帰ってきたな。

琵琶法師たち、知盛と重衡を囲む。

琵琶法師　ベンベンベンベン（先日の大火事の件ですが）

宗盛　　あ、大火事についての話はまだちょっと、本人も傷ついてますので、ベンベンベンベン（説明責任を果たしてください！）

宗盛　　説明責任だって？

重衡　　大丈夫です。ありがとむねちゃん。あの、お答えします。

琵琶法師1　ベンベンベンベン？（あの火事でご自身も怪我をしたとか？）

ええ、僕もあの大火事で火傷をしました。（腕の包帯を見せる）しかし、火傷はいつか治りますが、大仏を燃やしてしまったというこの罪は、生涯消えることがないと思っています。

琵琶法師2　ベンベンベンベン？（火をつけたのは清盛の指示だったという話もあるが？）

重衡　　いえ、父の指示ではありません。あれは、あくまでも事故です。坊さんたちの暴動がなかなか鎮まらず、夜までかかったので松明を燃やしたんですが、その火が風にあおられて。

琵琶法師3　ベンベンベンベン？（周りの反応はどうだったか？）

重衡　　正直、周りはドン引きです。そりやそうですよ。大仏ですよ。仏さまですから。まあ、父はよくやったってほめてくれたんですけど……

宗盛　　（慌てて）はい！　　以上です！　　重衡への質問はもうやめてくださいーい！

琵琶法師　　ベンベンベンベン！（父がほめたのくだり詳しく！）

宗盛　　とにかく、我々としては、今までの平家のイメージを払しょくし、新しい平家を国民の皆様にもアピールしていきたいと思っております。よろしく願います！　　今日のところはこれでお帰りください！　　表にタクシーを用意しておりますので！

宗盛、必死に琵琶法師たちを追い立てる。

琵琶法師たち、ベンベン言いながら去る。

宗盛　　しげちゃん、頼むぜ。

重衡　　ごめん兄さん、つい。

宗盛　　なんとかちよつとでも、親父のイメージを良くしたいと思ってるんだから。

知盛　　そんなに悪いオヤジじゃないんだけどな。世間の評判は悪いんだよな。

宗盛　　まあ仕方ないよ。あ、後白河院のどこ、行ってきた？

知盛 もちろん。事務的なことはあわじいに任せてきた。  
宗盛 どうだった？  
知盛 いやあ、もう、ネチネチとイヤミを言われたよ。重衡が。  
重衡 火傷のあとを見せろって言うんだよ。  
宗盛 見せたのか。  
重衡 逆らえないもの。で見せたらさあ……  
宗盛 なに。  
知盛 仏様の怒った顔が浮き出て見える、とかいうわけ。  
宗盛 うわー。  
重衡 へこむよねー。  
宗盛 気にすんな。言ってるだけなんだから。  
重衡 分かっただけだね。  
宗盛 やっぱシゲちゃんに行かせなきゃよかったな、ごめんな。  
重衡 いやいや、まあ、いつまでも引きこもってるわけにもいかないし。  
知盛 昔は仲良かったのにね、後白河院と親父。  
宗盛 年を取るとき、マウンツの取り合いになってくるんじゃないの。  
宗盛 まーでもさ、いくら仲悪くてもさ、閉じ込めちゃだめだよ。  
重衡 うん。  
知盛 ほら、昔さ、僕らがなんか悪いことしたら、蔵に閉じ込められたじやない。あの感覚なんだと思う。  
知盛 いやでも相手は後白河院だぞ。息子じゃないんだよ、天皇家。しかもその天皇家の中でも一番偉い。権力のとっぺんだからね。  
宗盛 もうだから、僕たちにできることはさ、ただだけイヤミを言われようが、頭下げて監禁を解いて、御所にお戻りいただくことだけ。  
知盛 その判断で間違いないと思うよ。  
重衡 大変だねえ、総大将。  
宗盛 なんて僕が総大将かねえ。  
知盛 まあ頑張れよ。しげちゃんが火傷跡見せてくれるよ。  
重衡 見せねえよ。  
宗盛 仏の顔？  
重衡 浮き出てねえって。  
宗盛 え、でも万が一が。  
重衡 ねえよ。  
知盛 一瞬一瞬、  
重衡 見せねえよ、巻きなおすのめんでいーだろ。  
宗盛 キツネが走ってくる。

宗盛  
キツネ

あ、キツネ。  
コンコン。

知盛  
キツネ  
え、なにそれ。こわっ  
ほたる…  
キツネだよ。

安徳天皇、走りこんでくる。

安徳天皇  
おお、こんなところにいた。

キツネが安徳天皇の懐にかけよる。

宗盛  
陛下。

そのままよい。

知盛  
そのキツネ、陛下のお友達でしたか。

安徳天皇  
ああ。名前はニンゲンちゃんじゃ。

知盛  
独創的なお名前ですね。

宗盛  
おひとりですか？

安徳天皇  
いや、おかあさまもすぐにくる。

建礼門院、登場。

建礼門院  
陛下、走ってはいけないと言ってるじゃありませんか。

安徳天皇  
ニンゲンちゃんを見つけたのだ。

建礼門院  
ああもう、こっちによこしてください。おばあさまに怒られますよ。

宗盛  
いいじゃないか、ペットくらい。

建礼門院  
噛んだらどうするんです。

知盛  
心配し過ぎだろ。

建礼門院  
だって、天皇ですよ！

安徳天皇  
こら噛むな噛むな。

建礼門院  
ぎゃーっ！

知盛  
甘噛みだよ、じゃれてんだ。

建礼門院  
陛下！ それをこっちに。(へっぴり腰)

宗盛  
それじゃ無理だろ。

そこに、平清盛の未亡人、二位尼が現れる。

二位尼  
徳子！

建礼門院  
はい、お母さま。

二位尼  
そのケモノを陛下に近づけるなと言ったでしょう！

建礼門院  
申し訳ありません。

二位尼

ほら早く、そのケモノをはがしてさしあげて。

建礼門院

ほら陛下、はやく。(へっぴり腰)

安徳天皇

いやじゃ。渡したら捨てるのであろう。

建礼門院

すてません！ すてませんから早く。

二位尼

もう何やってるの徳子！ 陛下に傷がついたら国家の一大事よ！

建礼門院

はい、ただいま。(キツネが怖くて近づけない)

キツネ

シャーっ！

建礼門院

ひゃーもうむり！

二位尼

もう情けない。陛下、ほら、ばばにそのケモノをおよこしてください。

(おなじくへっぴり腰)

安徳天皇

いやじゃ。余とニンゲンちゃんは友達じゃ。

二位尼

ケモノには、人間の心がわかりません。陛下が友達だと思っ

ても、いつ噛みつくか分かりませんよ。

キツネ

それはあんたらも一緒だよ。

二位尼

うわ吠えた。

宗盛

母さん、ちよつと過保護がすぎるよ。

二位尼

過保護でなにが悪いの！ 天皇なのよ！ 天皇なのよ！

宗盛

分かっているよ。

二位尼

(ひそひそと) 私たちがお父ちゃん亡きあとも大きな顔をしていら

れるのは、徳子が男の子を生んだから。天皇陛下のママだからなのよ。もし万が一でも陛下になにかあったら、私たちもただじゃすまない。

宗盛

キツネ一匹でおおげさな。

二位尼

キツネに滅ぼされた国もあると聞くわ。

建礼門院

さ、そのケモノを、早く。

安徳天皇

なんと言われようと、ニンゲンちゃんは余の友達じゃ。すでに余に

なついておる。これはそこらにいるキツネとはもう違うのじゃ。そしてキツネにとつても、余はほかにいる10万人の男の子とはもう違うのじゃ。

二位尼

陛下が、そこらにいる男の子と違うことはよく存じております。だ

からこそ、

重衡

母さん。陛下がここまでおっしゃってるんだ。これ以上は、不敬に

あたるよ。

老将、あわじいこと、阿波民部成良(あわのみんぶしげよし)が現れる。

あわじい

知盛坊ちやま。

知盛

あわじい、帰ってきたか。

あわじい

ただいま後白河院を無事、御所までお送りしました。

知盛

あー（ごまかそうとするが遅い）

二位尼

あわじい、どういうこと？

あわじい

は？

二位尼

今、後白河院を自宅まで送ったと。

あわじい

さようでございます。いつまでも閉じ込めておくわけにはいかない  
と、総大将のご判断で。

二位尼

宗盛！

宗盛

いやー、もう遅かれ早かれこうなると思ってたから全然オツケー。

二位尼

私は反対したはず。

宗盛

ええ、分かってますとも。

二位尼

どうしてあなたはお父ちゃんのしたことをなかったことにしようとするの。

宗盛

後白河院ですよ。いつまでも閉じ込めておくわけにはいかないでし  
よう。

二位尼

お父ちゃんならやりました。

宗盛

父はもういないんです！ 父なき今、平家のイメージアップのため  
に手を尽くしてるんです分かるでしょう。

二位尼

イメージアップ？ なにそれわけわかんない。なんでそんなこと。

宗盛

評判が最悪だからですよ！

二位尼

周りの評判なんかどうでもいい。必要なのは圧倒的強さ。アンチを  
従わせてこそその権力！

宗盛

遠い遠い外国に、グンタイアリというアリがいるそうです。

二位尼

なに突然。

宗盛

小さなアリですが、何万と言う数で獲物に襲いかかり、大きなケモ  
ノをみるみるうちに骨だけにしてしまうんだとか。

二位尼

遠い外国の話でしょ。この国のアリは、毒も持たず、噛みつかず、  
甘いものさえ与えればいつまでも働き続ける。

あわじい

坊ちやますみません。ワタクシ、いらぬことを言ってしまったよう  
で。

知盛

気にするな、あわじい。

建礼門院

後白河院、どんな様子でした？

あわじい

それはもう、我々への愚痴、非難、憤り、聞くに堪えないヘイトス  
ピーチの嵐でございました。

建礼門院

後白河院と仲直りしないと。

二位尼

そんな必要ないわ！

建礼門院

お、お兄ちゃんー

宗盛

母さん、思いあがってはいけません。後白河院は事実上の最高権力  
者なんです。

知盛

院の命令は絶対だからな。

宗盛

嫌われていいことなんかひとつもありません。



重衡

二位尼

宗盛

もしかしたら、源頼朝あたりに、平家を討て、なんて命令を出すか  
もしれない。そうだったら最悪です。  
まさか、いくら後白河院でも、長年べったり癒着してきた平家を敵  
に回すなんて。  
分かりませんよ、後白河院のお心は。もしかするともう、最悪の事  
態は始まっているかもしれません。

☆

源頼朝、登場。

イライラと、部屋の中を掃除している。

梶原景時登場。

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

景時

頼朝

頼朝さま。  
おお、景時、待ちかねたぞ。  
掃除は下の者にやらせてください。  
やらせたやらせた。  
お気に召しませんでしたか。  
ただの、最後の仕上げだ。  
あがってもよろしいですか？（靴の裏を見せる）  
いいぞ。  
平家を討てとのご命令、無事、後白河院より承ってまいりました。  
よくやった。しかしちよろいもんだな。後白河院は平家、特に清盛  
とべったりだったはずでは。  
平家の力が大きくなってからは、後白河院が平家に付度しなければ  
ならないシーンもあったでしょうからな。齒がゆい思いもされてい  
たのでは。  
なるほど。  
後白河院直々のご命令、いただいたからには我々源氏が官軍。正義  
の御旗でございます。心おきなく、につくき平家を叩きつぶすこと  
が出来ます。  
かつては私がツミビトだった。お言葉一つで正義と悪がこうも簡単  
に入れ替わる。後白河院はおそろしいお方よ。  
恐ろしいと言えば。  
なんだ、怖い話か？（汚れを見つけてこすりだす）  
後白河院から聞いたのですが、清盛の遺言が恐ろしいのです。  
ほう、清盛はなんと。  
頼朝の首を墓に供えよ、と。  
これ、とれんなー。  
……  
かつて私を助けたこと、後悔しているだろうな。

景時

これから、さらに後悔することになります。

頼朝

……（床をこすり続けている）

景時

あの、激落ち君、持ってきたましようか？

頼朝

幼い私を殺さぬよう、清盛にとりすがってくれたあのおばさん。

景時

え、ああ、たしか、池の禪尼とかいうご婦人でしたな。

頼朝

彼女にはワスレガタミという息子がいる。命の恩人の息子だ、彼に

は便宜を図ってやりたい。

景時

平家を裏切らせる、ということですか。

☆

ワスレガタミと宗盛。

ワスレガタミ

ないないないない！　ないないない！

宗盛

いやもちろん、ワスレガタミパイセンを疑ってるわけではないんです。

ワスレガタミ

あれっしょ？俺たちが頼朝の恩人の息子だから、頼朝と極秘に連絡

とりあつてんじゃないかって、そういう話っしょ？

宗盛

はあ、いや、まあ。

ワスレガタミ

ないないない！　そういうのもう、全然ないんでー。だからそのう

まい具合に源氏と裏取引？　も無理だしー、逆に？　俺たちが頼朝

と手を組んで裏切り？　みたいなのも絶対ないっす。絶対、絶対、

絶対ないんで。

宗盛

そうですか、安心しました。

ワスレガタミ

マジでこのワスレガタミ。平家のために、ていうか、ムネリンのた

めに、まじ命捨てる覚悟だから。源氏絶対殺すマンだから。そこん

とこしくよろで。

宗盛

はい。

ワスレガタミ

後白河院が源氏についちやってやばたにえんだけども、大丈夫。

宗盛

よろしくお願いします

ワスレガタミ

むしろ俺たちに言わせれば？　裏切りそうなやつ、もっと他にいる

んじゃない？

宗盛

ええ？　……誰です。

ワスレガタミ

ちゃんこれだよ。

宗盛

ちゃんこれが？　まさか。

ワスレガタミ

ありえん怪しみが深いでしょ。

宗盛

そんなことありませんよ。

ワスレガタミ

かばうねー！　かばいをするねー！

宗盛

いや、かばってるわけじゃなく、その、根拠はあるんですか。

ワスレガタミ

根拠！　ムネリン、それ、俺たちに言わす？

宗盛

いや、わ、わからないから聞いてるんですよ。

ワスレガタミ  
マジマンジ？ だって、本来なら平家の総大将を継ぐのはちゃんこ  
れだったんだぜ？ それを、清盛公がわがまま言って、無理矢理ム  
ネリンに継がせたんだろうが。

宗盛  
僕は別に、  
ワスレガタミ  
ムネリンが総大将やりたくないのはさ、ちゃんこれには関係なしん  
こなしなしじゃね？

宗盛  
いや別に、やりたくないわけでは、  
ワスレガタミ  
ならいいけど？ 総大将めんでいーって態度かましてつと、ちゃん  
これはカチンとくるんじゃないやねえの？

知盛と重衡が走ってくる。

知盛  
むねちゃん！

宗盛  
どうした。

ワスレガタミ  
ちよりーす。

知盛  
あ、パイセン。ちよりーす。

重衡  
ちよりーす。

宗盛  
仲いいな。

知盛  
むねちゃん、頼朝ばかりに注意していたらまさかの伏兵登場だ。木  
曾義仲が、都に攻めてくるとの情報が入った。

宗盛  
木曾義仲だと？

☆

バイクのエンジン音など、暴走族の音。

木曾義仲、巴御前、今井四郎とバイクで登場。

義仲  
どけどけー！ 邪魔だ邪魔だー！

今井  
木曾義仲さま、並びに巴御前さまのお通りでございます！

義仲  
平家の連中ぶっ殺して、世界獲っちゃいますかあ。

巴  
きゃー！ 義仲ちゃん！

義仲  
しんしん信濃のド田舎で、くすぶり続けて幾星霜。頼朝のヤローが  
旗揚げたとなっっちゃあ、この木曾義仲、同じ源氏としてだまっちゃ  
いらねえ。

今井  
この今井、どこまでもお供する覚悟でございます！

巴  
平家もつぶして、ついでにファツキン頼朝もぶつつぶす！

義仲  
ファツキン頼朝！ オーイエ。巴御前、よく言った！ 源氏のリー

ダー気取ってるあのくそ野郎には、誰が本当のリーダーなのか教え  
てやらねえといけねえようだぜ。

巴  
義仲ちゃん、かっこいいー！

義仲  
巴！ 愛してるぜ！

巴と義仲、がつきと抱き合う。今井、拍手。

今井

さて義仲さま、どちらに向かいますよ。

義仲

もちろん、京の都よお！

巴

へいへいへいへい！

バイク三台、走り去る。

☆

宗盛達の話し合い。

宗盛

木曾義仲、兵の数は？

知盛

およそ五万と聞いている。

重衡

こつちに向かつてくるその道中で、どんどん兵の数を増やしてるらしい。最悪だよ。

宗盛

義仲が五万で向かってくるなら、こつちは十万で迎え撃とう。

ワスレガタミ

マンジ？二倍も出すのか。

宗盛

ほんとは三倍出したいくらいです。確実に勝てるイクサをしたい。

ワスレガタミ

なんかそれ……、いけてなくね？

宗盛

いけてない？

ワスレガタミ

やっぱさ、敵より少ない人数でポコパンしてこそっしょ。

宗盛

それで負けたらどうするんですか。

ワスレガタミ

だーからそりはよ、勝てる作戦考えんでしょーが。

宗盛

……いや、二倍出します。数で勝つ、これが今我々がとることのできる最も確実な作戦です。

ワスレガタミ

かつちよわり。

知盛

大将はどうする。十万の兵を率いるんだとしたら、それなりの

宗盛

ちゃんこれはどうだろうか。

間

知・重

いやあーちゃんこれは……

重衡

立場微妙じゃない？ ほら、ちゃんこれの嫁、ちよつと複雑でしょ。

宗盛

立場が微妙だからこそ、チャンスを与えないと。

知盛

いやでもあいつさあ、めっちゃめっちゃビビりよ。

宗盛

ビビり？

知盛

この前、ちゃんこれがね、庭先で、日向ぼっこしながらちよつとこ

重衡

う、こつくりこつくりしてたのよ。  
おばあちゃんかよ。

知盛　で、庭に、ハトがすげえいっぱい集まっていたの。で、ちよつとちゃんこれをね、驚かせてやろうと思つて。ハトの集団に向かつて、小石をぽつと投げたのよ。

宗盛　悪いことするわー

知盛　そしたらハトが一斉にぱつと飛び立つじゃん。それで、ま、びくつてなつて目を覚ますかなと思つたら、うん。

宗盛　ちゃんこれ、その、ハトの羽ばたく音で、うやああ！　つて叫んで、

そのまま家の中にばー走り出して、で、ふすまをばーん！　つきやぶつて、

重衡　トムとジェリーみたいに。

知盛　そうそう、穴が、ちゃんこれの形で空いてね、

宗盛　それは嘘だろ。

知盛　で、ふすまつきやぶつて、で、その先の壁にバーンぶつかつて、で、そのままこう（背中から）倒れてつた。

重衡　ハトで。

知盛　ハトの飛び立つ音で。

宗盛　いやまあ、びっくりすることは誰でもあるから。

知盛　逆に、なんでちゃんこれ推すの？

ワスレガタミ　試したいんだよな？

知盛　試す？

ワスレガタミ　ムネリンのには、ちゃんこれが平家を裏切るんじゃないかっていう

疑いがあるわけ。

宗盛　疑つてませんよ！

ワスレガタミ　だから、源氏と本格的にバトる前に、ちゃんこれの忠誠心を試したいつてこと。

違います。

宗盛　じゃ、なによ。

宗盛　先ほどパイセンもおっしゃったように、本来ならば総大将はちゃんこれが継ぐのが道理。

知盛　そうでしたねえ。

宗盛　そのことを今、ちゃんこれがどう考えてるかは分からないけど、少なくとも世間は、いろいろと詮索をする。パイセンみたいに。

ワスレガタミ　おつと矛先が向いちっち。

宗盛　しかもちゃんこれ、奥さんの件で、立場が微妙でしょ？　ここで僕

がちゃんこれを推すことで、僕がちゃんこれを信頼し、また、ちゃん

んこれもその期待に応える仲だということを、世間にアピールしたい。

期待に応えてくれりゃあいいけど。

重衡　宗盛　応えてくれるさ。だって、兵力二倍だぜ。二人で一人やりゃあい

んだから。というわけで、頼んだぞ、ちゃんこれ！

維盛に光が当たる。

わっ、まぶし！ びっくりしたー。え、なに？ ああ、自分の影か。

知盛 超不安なんですけど。

宗盛 頼む、頑張ってください。

☆

俱利伽羅峠。

維盛

あー、道せめー。やっぱ信濃の山猿なんかと戦いたくないよー。なんで宗盛おじさんは、僕を大将にしたんだ……。まさか、この戦いで死ねばいいと思ってるんじゃない……。いやいや、そんなはずない。だって、僕のために十万の兵を用意してくれたんだから。二人で一人やればいい、二人で一人やればいい……

別の場所に、今井、義仲、巴が現れる。

今井

義仲様！ 平家が十万の軍勢を出してまいりました。

義仲

ホーリーシット！ 平家のやつらどんだけ兵力あんだ？ ころ。しかし、四万の兵を三千で破ったこともあるこの俺様。十万の兵を五万で破るなど赤子の手を捻るに等しい。(客席に)お前ら！ 十万と言われるとヤベエと思うだろうが、十万の兵が力を発揮するためには、そいつら全員が戦えるだけの広さが必要だ。ここ、俱利伽羅峠は道が狭い。ここなら、やれる。

巴

でも、俱利伽羅峠を抜けたらだだっぴろい平野だよ。抜けられたらどうすんだい。

義仲

抜けられなきゃあいんだよ。(客席に)今から、俺さまが合図を出す。そしたら源氏の白旗を一齐に掲げる。すると維盛は、思った以上に敵がいると思って、ビビる。ビビって、一旦ここに陣を張るだろう。あとは夜まで引きつけて、一気に地獄谷に攻め落とす。

巴

地獄谷、ここね。うわめっちゃ深い。

今井

はい。落ちたら絶対に助かりません。義仲さま、合図を。

義仲

ではいくぞ、白旗用意。3、2、1、ゴー！

義仲の合図で客席が白に染まる。

維盛

わ！ 真っ白だ。これ、源氏の白旗だよ。五万って聞いてたけど、もっといるんじゃないの。(後ろに)ストップストップ！ ここは、一旦慎重になろう。なんか、こっち十万いるし！ みたいな勢いで

ーっていくと、よくないことになりそうだから、一旦ここで陣を張って、様子見よう。

義仲と巴、今井が現れる。

義仲  
維盛  
（バイクを乗り回しながら）ひゃっはー！  
わー出たな義仲！

維盛の軍、義仲と巴のバイクテクに翻弄される。  
ちよっとして、義仲たちは去る。

維盛  
義仲  
維盛  
あれ？ 帰った？  
（再び登場）ひゃっはー！  
わーまた来た！

義仲たち、適当に維盛をあしらって去る。

維盛  
今井  
今井  
維盛  
今井  
維盛  
なんだあいつら。やる気あんのか？  
カーカー  
え、もう夕方？  
ホーホー  
わ、もう夜！ （兵たちに）お前らよく聞け、ここをキャンプ地とする！

維盛軍は全員眠っている。

義仲  
今井  
義仲  
さすが平家のおぼっちゃん。あほみたいに眠ってやがる。前と後ろから一気に攻めれば、  
残された逃げ道は、  
谷底だけ。

バイクの爆音とまぶしいヘッドライト。  
暗闇の中、阿鼻叫喚が響く。

☆  
琵琶法師に囲まれて、宗盛が会見を開いている。

琵琶法師  
宗盛  
ベンベンベンベン……  
はい、あの、具体的な数は分かっておりませんが、十万の兵のうち、  
およそ七万が、命を落としたと聞いております。

琵琶法師  
宗盛

ベンベンベンベン  
いえ、あの、決してそのようなことはありません。今回、大将を務めた平維盛は、精いっぱい、平家勝利のために尽くしてくれたと、そう認識しています。決して、わざと負けた、と言うような事実はございません。

琵琶法師  
宗盛

ベンベンベンベン！  
義仲が都に、いよいよ攻めてくる件に関しましては、引き続き、我々平家の方で対策を講じてまいりますので、どうか市民の皆様におかれましては、安心して、日常生活を送っていただければと思います。

琵琶法師  
宗盛

ベンベンベンベン……  
はい。ええ……、今回の、俱利伽羅峠におきましての、敗北、につきましては、すべて、総大将であるわたくしの采配ミスであります。謹んで、お詫び申し上げます。（お辞儀）

琵琶法師たちのベンベンいう音に、カメラのフラッシュ音が重なる。

知盛

それでは、会見は以上となります。ご足労いただいた皆様に、ささやかながら宴の席を用意しておりますので、どうぞ、お時間ある方はご参加ください。  
こちらです。

重衡

琵琶法師たち、ベンベン言いながら宴席へと移動する。  
そこに、平教経が現れる。

教経

少々酒を飲ませたくらいで、琵琶法師どもの舌先が鈍くなるとは思えんが。

宗盛

教経さん。

知盛

ま、やらないよりは。

教経

まったく、あんなやつらにぺこぺこして、平家の面汚しだ。

宗盛

……すいません。

教経

で、どうする。

宗盛

は。

教経

維盛の処分だ。七万の兵を無駄にしたのだ、おとがめなしというわけにはいかない。

宗盛

ああー

教経

お前が気にしている世間にもしめしがつかんだろう。

宗盛

しかし、ちゃんこれを行かせたのは僕ですから。

教経

お前がすべての責任を取るのか？

宗盛

それが総大将のつとめかと思っっています。

教経

そんなに単純な話ではない。



宗盛

はあ。

知盛

まああのー、責任問題もちろんあれですが、今は、義仲の件について対策を講じるのが先ではありませんか。なんせ、急を要する事態ですから。

教経

対策を講じるも何も、都の門前で蹴散らす以外にあるまい。

重衡

蹴散らせますかね。

教経

やるしかないだろう。

重衡

十万だして勝てなかつたんですよ？

教経

ならば十五万出すだけだ。

宗盛

そんなにいません。

教経

十五万くらい出せるだろう。

宗盛

国中が平家のいいなりだった頃とはもう違うんです。後白河院は、

教経

頼朝に平家を討てと命令を出したんですよ。つまり、我々平家に味

教経

方すれば、朝廷に逆らうことになるんです。

教経

維盛なんかを大将にするからこんなことになるんだ。

教経

ワスレガタミが現れる。

教経

ワスレガタミが現れる。

教経

ちよりーす。

教経

ワスレガタミ。

教経

俺つちに、いいアイデアがありまーす。

宗盛

なんですか。

ワスレガタミ

比叡山のヤンキー坊主たちに応援を頼む。

教経

なるほど、その手があるな。

ワスレガタミ

比叡山の連中なら、相手が朝廷でも関係ねえ。金もあるし、あいつ

ワスレガタミ

らいつでも喧嘩したくてうずうずしてるっしょ。

重衡

協力してくれませんか。

教経

比叡山とは昔から持ちつ持たれつでやってきた。心配ない。

教経

あわじいがやってくる。

教経

あわじいがやってくる。

あわじい

大変でございます！

知盛

どうしたあわじい。

あわじい

坊ちやま、もうわたくしどうしてよいやら。

教経

どうした早く話せ。

あわじい

つい今しがた、比叡山から連絡が入りまして、

ワスレガタミ

向こうからとは気の利く奴らだ。

あわじい

比叡山は、木曾義仲を応援すると、正式に発表がありました。

教経

なんだと？

重衡

最悪だ。よりによって義仲に。

宗盛 完全に見限られた。そりゃあ、落ち目の平家につくよりは、上り調子の源氏についた方がいいに決まってる。

教経 落ち目だと！

宗盛 落ち目でしようよ！

教経 貴様、平家でありながら平家の批判をするのか。

宗盛 それをしてこなかった、その結果が今です！

教経 落ち目と言うなら、立て直す手段を考えろ。それが総大将の役目ではないのか。

宗盛 ……

教経 時間はないぞ。

宗盛 わかってます。

知盛 そんなイライラせずに。我々上層部に余裕がなくてどうします。いとこどうし、仲良くやりましょう。

教経 調子のいいやつだ。

宗盛 時間が必要です。

教経 ああ？

宗盛 立て直すのにも、反撃するにも、時間が必要です。だから、その時間がないと言ってるんだ。義仲はすぐそこまで来ている。

宗盛 時間がなければ稼ぎましょう。

教経 なに？

宗盛 一旦都を離れ、西へ向かうんです。

教経 都を捨てるというのか。

宗盛 その、わざわざ捨てるという言い方をしなくてもいいじゃないですか。

教経 わしじゃない、お前の好きな世間がそういう言い方をするんだ。

宗盛 今の状態で、比叡山の力を得た義仲と戦っても確実に負けます。四国とか、九州の方には、まだ平家に味方してくれる者もたくさんいるはずですよ。

ワスレガタミ ムネリン、それマジで言ってる？

宗盛 もちろんです。

ワスレガタミ 今の平家じゃ義仲に勝てない？ そんなのやってみなきやわかんなくね？ ていうか、ぶっちゃけ今回の負け戦は、義仲に対して本気出してなかったのが原因なわけ。

知盛 いや本気は出してますよ。

ワスレガタミ ちゃんこれを大将にしてる時点で本気じゃないっしょ。

知盛 もごもごもごもご

宗盛 確かに、ちゃんこれじゃなければ勝てたかもしれません。ですが、それはわからないじゃないですか。それに少なくとも、今の状態では誰が大将になっても勝てやしません。

ワスレガタミ なんつーか、がっかりって感じ？　こんなやつが総大将で。

重衡　こんなやつとはなんです。

ワスレガタミ　華がねえんだよ華が。勝てない、逃げよう、そんなことばっか言いやがって。

重衡　じゃあパイセンは義仲に勝てるって言うんですか。

ワスレガタミ　だからやってみなきゃわかんなくねって言うてんだよ。

重衡　いいですよねパイセンは。いざとなったら頼朝に守ってもらえばいいんだから。

ワスレガタミ　あ？　なんだてめえ。

知盛　しげちゃん言い過ぎだぞ

ワスレガタミ　俺っちが平家裏切るって？

重衡　みんなそう思ってますよ！

ワスレガタミ　てめ、まじぶっ殺す！

ワスレガタミと重衡をみなで取り押さえる。

知盛　やめろしげちゃん！　あっちもこっちも大炎上とか笑えねえから！

あわじい　坊ちやま方！　今は内輪もめしている場合ではございません！

なんとかお互いを落ち着かせる。

知盛　しげちゃん、今のはお前が悪い。パイセンに謝れ。

重衡　（バチバチ）さーせん。

ワスレガタミ　（バチバチ）あざーす。

宗盛　さ、また会を開かなくてはいけません。それから旅の準備も。琵琶法師たちになんていうのだ。

宗盛　ありのままを話しますよ。

教経　（ため息をついて）愚将と呼ばれる覚悟だけはしておけ。いくぞ。

教経、ワスレガタミ、あわじい、去る。

宗盛に、知盛と重衡が声をかける。

重衡　あー、悪かった、ごめん。

宗盛　いや全然、むしろこちらこそ。

知盛　もう、地雷踏むんだから。

重衡　わざと踏んだんだよ。

宗盛　しげちゃん、ありがとう。

重衡　まあまあ。

知盛　いやー、美しき兄弟愛だわ。

二位の尼、登場。

二位尼 会議は終わったのかい。

宗盛 はい、母さん。

二位尼 どうするんだい？ 義仲が攻めてきてるんだろ？

宗盛 西へ行こうと思います。

二位尼 都を捨てるのかい？

知盛 捨てるって言い方はちよつとあれかな。母さん、戦略的撤退だよ。

今、義仲は都へ進軍する道中でどんどん仲間を増やしてる。もちろん我々平家は強い。でも、ライオンはウサギを狩るのにも全力を出すっていうだろ？ 西には味方もたくさんいるし、福原もある。

二位尼 福原！

知盛 親父が残した福原の都に、久しぶりにみんなで行こうじゃないか。どうせ勝ち戦なんだ、楽しくやろうっていう、兄さんの判断だよ。

二位尼 宗盛。

宗盛 は、はい。

二位尼 あんたも随分総大将らしくなってきたじゃないか。死んだお父ちゃんも、きつと同じことを言ったに違いないよ。

宗盛 そうかな。

さあ、そうと決まればさっそく準備。安徳天皇もお連れしてのオミユキだ。粗相のないようにしなくちゃいけないからね。さあ旅支度旅支度！みんなー！ 福原に行くよー！

二位の尼、去る。

重衡 さすがともにい。

知盛 口先だけの男でござんす。

宗盛 助かったよ。さすが、知将と呼ばれるだけはある。

知盛 なんだ知将って、痴漢のチか？

宗盛 知恵の知だよ。

重衡 知盛のトモだろ。

知盛 すいませんね、名が体を表しちやつて。

宗盛 僕は愚将でいいから、ともちゃんが知将でよろしく。

重衡 え、じゃあ僕は？

知盛 大仏焼き太郎。

重衡 ともちゃん、まじでへこむからそれ。

知盛 ごめんごめん。

重衡 まじで、いまだに夢に見るんだから。…平家へのヘイトデモを行う奈良の坊主たちが、こっちに向かってくる。ぽぼんぽぼんぽん 平家はいらん！ ぽぼんぽぼん 平家はいらん！

風にあおられ松明の火が寺に燃えうつる。一気に吹き上がる炎。燃える大仏、その顔が、だんだんと親父に変わっていくんだ。親父が、地獄の炎に焼かれながら僕を責める。炎、すべて焼き尽くす。ゲツチュ!

大仏焼き太郎とか言ってごめん。

しげちゃん、お前も親父は地獄にいるとおもうか。

まさか、極楽に親父の居場所はないだろう。

：：：そうだな。さあて、西へ向かうぞ!

楽しそうだな。

(やけっぱち) 楽しいわけないだろ! 義仲なんぞに追い立てられて、都を明け渡すんだぞ!

最悪だ!

最悪だー!

都にいてえー!

福原とか、行きたくねえー!

ともちゃん、しげちゃん。

なに。

なんだよ。

絶対戻ってこような。

☆

源氏を追い立てながら、都に木曾義仲、巴御前、今井四郎が現れる。

今井

木曾義仲さまの都入りでございます!!

巴

こんにちわー!!

義仲

あっちゅうまの一昼夜で都の景色も平家の赤から源氏の白へ様変わりだ。これからはこの義仲が、都をしめさせてもらうぜ。

今井

後白河院からは恐れ多くも、朝日の將軍というお名前をいただきました。これすなわち義仲さまが、院に認められた証。

義仲

朝日の將軍か。さしずめ、都からみれば信濃は東。東から現れた太陽のようなお祭り男。義仲・インテイライミというわけだ。

巴

なにそれ、超かっこいい。

今井

義仲さま、あんなところに貴族どもが。

義仲

なるほどいい機会だ。都育ちの貧弱なおじやるどもに、インテイライミのパンチライン、聞かせてやる。

三人、客席に下りていく。

お客さんの前でラップを披露する。

義仲

(rap) 俺の名前は木曾義仲 今から教えるラップの基礎

おしながきの最初はマジカルライム またがるバイク 戦うマイク  
お前は言うもうこりごり 七万の敵谷底に放り込み  
都に乗り込み 額に剃りこみ してやるぜ全員虜に

(拍手)ゴリゴリでございます!

どうした、こいよ! はっはっは、ビビって声も出せないようだな。

お前から出場権を奪い取ってやる、なにかの。もうお前は、なにか  
の大会に出られない。

あんた最高だよ!

もっともっと奪いつくして、この国ごと奪い取る! なにしる俺様  
は、朝日の将軍、義仲・インテイライミだ!

三人、呵々大笑。

☆

そこに声が鳴り響く。

義経 義仲 誰だ!  
礼儀も知らない田舎源氏が、天下人気取りとは笑止千万。殺します!

高らかに笛の音。  
源義経、登場。

義経 みなさんこんにちは! 源義経です! 日本人ならみんな大好き、

義経がやってまいりました! そして、

佐々木の高綱

佐々木の高綱。

梶原景季

梶原景季

全員

我ら、義経特選隊!

義経

木曾義仲。後白河院の命により、お前を討つ!

待て待て待て、後白河院の命ってそれおかしいだろ。こっちは後白  
河院から、太陽の国のお祭り男、朝日の将軍義仲インテイライミつ  
て名前もらってんだよ? これすなわち、院から直々に認められた  
ってことでしょうよ。

義経

インテイライミだかパンテイライナーだか知らねえがな、都でお前、

随分やらかしてくれたみてえじゃねえか。

佐々木の高綱

おとなしいお客さんにラップバトルをしかけたり、

梶原景季

女子楽屋をノックせずに関けたり。

義仲

してねえよそんなこと、やめろ。

ここで、義仲にラップでからまれたお客さんに粗品を渡す。

義経  
義仲  
義経

さつきは怖かったでしょう。これ、つまらないものですが、どうぞ。  
うわ人気取りだわーペッペッ  
とにかくそういうことの積み重ねで、もう後白河院はカンカンなわけ。こっちとしても、源氏の評判落とされるのマジ勘弁なんで。殺します！

義仲

いやいや、待て待て。貴様と俺とは同じ源氏だろ？ 同じま白き御旗のもとに集いし同胞じゃろがい。俺様は都から平家を追い払った。それもこれもすべて源氏のため、後白河院のため。仲良くしようぜ。もうね、そういうところ。

高綱・景季

そういうところ！

義経

頼朝兄さんめちやくちや怒ってたぞ。山猿が里に下りたらただの害獣。害獣は、駆除だってな。

今井

なんとという愚弄。

義仲  
義経

頼朝のヤロー、人を人とも思わねえその言い草、ガッテンならねえ。ようしやる気になったか。殺します！

義仲、巴、今井と、義経、義経特選隊による、歌。

### M 「義経ソング」

あおり

エルオーブイイー ラブミー 義経！  
エルオーブイイー ラブミー 義経！

義経

売られなくても喧嘩は買うぜ 生まれついでイクサ好きだぜ  
鞍馬天狗と劍の稽古に 明け暮れた日々忘れない

義経達

カモンベイビー どっからでもかかってこいや（フワフワフワフワ）  
カモンベイビー 鴨川に fallin' down させてやろうか

巴

（セリフ）あたしたちも負けてらんないよ、今井！

今井

（セリフ）もちろんでございます。

あおり

エルオーブイイー ラブミー 義仲！  
エルオーブイイー ラブミー 義仲！  
エルオーブイイー ラブミー 義経！  
エルオーブイイー ラブミー 義経！

全員

カモンベイビー どっからでもかかってこいや（フワフワフワフワ）  
カモンベイビー 鴨川に fallin' down and go to hell!  
カモンベイビー どっからでもかかってこいや

うりやおおい！ コール高まり、テンションが最高潮になったところで、地味すぎる平家たちに場面が変わる。

☆

宗盛、知盛、重衡、のそのそ登場する。

知盛 なんか食べるものない？

重衡 あ、グミあるけど。

知盛 グミかー。じゃあいいや。

重衡 あそ。

宗盛 しげちゃん、僕、グミ欲しいな。

重衡 いいよ。

知盛 あ、じゃあやっぱ俺も。

重衡 なんだよ。

三人でグミを食べる。

知盛 誰かパイセン見た？

宗盛 いや。

重衡 見てない。

知盛 んー…どう思う？

重衡 いや逃げたっしょ。

宗盛 うーん

重衡 だって、あんな突っかかってきたのは逆にさ、

知盛 後ろめたいから？

重衡 そう！

宗盛 まあ、そうだよね。

知盛 ちゃんこれは？

重衡 ちゃんこれも逃げたかなー

宗盛 いや、ちゃんこれは。

知盛 そう？

宗盛 んー、信じたい。

間。

知盛 なんかのどかわくね、グミ。

間。



宗盛

平和だな。

知盛

都じゃあさ、源氏同士で戦ってるらしいよ。

重衡

へー。

宗盛

頼朝の弟だよ。あのー、義経。そいつがさ、まあなに、イクサ好き

重衡

らしいんだよね。

知盛

ええ、でも、それで同じ源氏を？

宗盛

まあなんか義仲も、そうとう都で好き勝手やってたみたいで。平家

知盛

の方がまし、とか言われてたらしいよ。

宗盛

なんか、その言われ方ちよつともやつとするー。

知盛

まあ、世間は好きにいうよ。

重衡

で、どっちが勝ったの？

知盛

さあ。

宗盛

共倒れになってくれたら一番いいよね。

重衡

あーそれ最高。

宗盛

そしたらすぐ都戻るよ。

知盛

すぐね。もう最速。

建礼門院徳子がパンを食べながら現れる。

建礼門院

お兄ちゃん。

知盛

徳子、歩きながらものを食うなよ。

建礼門院

お兄ちゃんたちだつてなんか食べてるじゃん。

知盛

これはグミだよ。

建礼門院

食べてるじゃん。

知盛

グミはいいんだよ。

建礼門院

はあ？

徳子、三人のそばへ。

建礼門院

あたし、福原嫌い。

宗盛

なんで。

建礼門院

荒れてるし、人いないし、なんかお父さんの黒歴史って感じ。

宗盛

黒歴史って言うな。

建礼門院

黒歴史じゃん。喜んでるのお母さんだけだよ。

宗盛

あのなあ徳子、親父がやったのはすごいことなんだぞ。四百年以上

建礼門院

続いた京の都を捨て、新しく都を遷すだなんて、天皇でさえそうた

建礼門院

やすくやれることじゃない。

宗盛

なんで？ お金かかるから？

宗盛

まあ、お金のこともあるけど、なにがすごいかというと、誰も賛成

重衡

してないのにやり遂げたってことだ。  
一年持たなかったけどな。

宗盛

建礼門院

それでも一度は遷都した。普通、あんなに反対されたらやめるぜ？  
それすごいのかなあ。

宗盛

建礼門院

すごいよ、まねできない。したくもないけど。  
ねえ、いつ都に戻るの？

知盛

建礼門院

うーん、正直言うと、福原が思った以上に荒れててさ。人やモノの  
補充がうまくいってないんだよね。

建礼門院

つまり？

重衡

建礼門院

なんか声聞こえない？  
つまり？

宗盛

建礼門院

もーちよつと、西に行きたいかな。  
また旅―？

と、維盛の声が遠くから聞こえてくる。

維盛

宗盛

宗盛さまー！ 遅くなりましたー！  
ちゃんこれ！

維盛が追い付いてくる。妻と、子供二人がくっついてきている。

維盛

知盛

お待たせいたしました！  
おー、ちゃんこれ！ てっきり逃げたと思ったぞ。

維盛

宗盛

そう思われてるだろうなと思って急ぎましたー  
ちゃんこれ、家族も連れてきたのか。

維盛

宗盛

いえ、都に残してきました。  
ついてきてるけど。

維盛

維盛家族

え？ お、お前たち！  
おとうさーん。

維盛

維盛妻

お前たちは連れていけないんだよ。  
どうしてですか！ 知盛さんだって宗盛さんだって家族を連れて行  
っているのでしょうか？ 私だってイクサビトの妻。戦場で死ぬ覚悟

維盛

維盛

はできております！

維盛

維盛妻

でもさあ、子どももまだ小さいし。  
じゃあなに！？ あなたは戦場でかっこよく死んで、私は小さい子  
ども二人抱えて生きて行けって言うの！？ あたしお母さんだか

維盛

維盛

ら！？

維盛

維盛妻

いや急にそんな怒らんでよ。  
ともに白髪の生えるまでと誓い合った仲間じゃありませんか。それな  
のに、都に残れだなんて。

維盛息子  
建礼門院

おとうさん。

えー、もう一緒に連れて行ったらいいのに。

維盛

そういうわけにはいかないですよ。

維盛妻

どうして？ 言いにくいことを言っ

維盛

：：知っているだろうが、お前のお父さんは、清盛公絶対殺す計画のメンバーだ。その娘が、都落ちについできたら絶対にいじめられる。

維盛妻

平家が一丸とならなければいけないときにいじめなんて。

維盛

いやいや、そんなときだからこそ起きるのだ。みんな殺気立ってる。当たれるものにはなんにでも当たる。それが人間だ。

維盛妻

でしたら、いっそ尼寺に行けとおっしゃってくださいまし。

維盛

何を言うオフリーア。俺はまだお前に人生を清算してほしくなどない。お前は若く美しい。正気でさえいれば勝機はある。どうか俺が死んでも尼にならず、いい男を見つけて再婚しろ。そして、二人の息子を立派に育ててくれ。

維盛妻

あなただったら、お願いばかり。

維盛

言いにくいことを言ったんだ。許してくれ。

維盛妻

：：わたしのお父さんのせいで、あなたの立場が悪くなりませんよ  
うに。

宗盛

安心しろ、この宗盛がついている。

維盛妻

無事のお帰りを、お待ちしております。

維盛

うーん（泣く）

維盛家族、去っていく。

重衡

ちゃんこれも、大黒柱なんだな。

維盛

おはずかしい。

建礼門院

連れてけばいいのに、あたしいじめないよ？

宗盛

いろいろあるんだよ。

建礼門院

お兄ちゃんたちは家族連れてきてるじゃん。

知盛

まあ、俺らはね。

重衡

連れて行かざるを得ない、みたいなどこもあるから。

建礼門院

え、じゃあ連れていきたくないの？

知盛

うーん、微妙！

宗盛

ほら、ちゃんこれの子どもまだちっちゃいから。うちの息子はもう、大人だし。

重衡

まあ、僕は子どもいないんで、奥さんだけだけど。

宗盛

ともちやんとこもね、ともあきら君だっけ。

知盛

うん。まあそこにいるけど。（客席から一人選んであげる）

宗盛

あ、なんだずつといたの。

重衡　イクサは初めて？　あ、そう。  
知盛　もうほんと、全然強くないから、すぐ死んじゃうんじゃないかと心配で。  
建礼門院　縁起でもないこと言わないでよ。

一同、笑う。と、明かりが知章（お客さん）のみになる。

知章（声）

僕の名前は平知章。お父さんの知盛について、はじめての都落ち。まさかこの後、本当に戦で命を落とすことになるとは、そのときは考えもしませんでした。

明かりが全体に戻る。笑い声の続き。

知盛　よし、じゃあ戻れ。（お客さんを席へ帰す）  
建礼門院　ありがとね、ともあきら君。

あわじい　あわじいが現れる。

あわじい　坊ちやま方！  
宗盛　悪い知らせか、あわじい。  
あわじい　ただいま宇治川にて、木曾義仲対源義経、義経のKO勝ちとの速報が入りました。

重衡　最悪だ。

あわじい　義経はそのまま、源氏の切り込み部隊として、ここ福原へ向かって  
いるとか。

宗盛　やはり、もう少し西に行くしかないな。  
建礼門院　どこまで？

宗盛　九州。

建礼門院　ええー？　九州って、菅原道真とか、さしことかが流された場所  
でしょ？　いやよあたし流刑地は。

宗盛　文句を言うな文句を。

☆  
源頼朝と義経。

義経　兄さん。頼朝兄さん。お菓子、食べませんかあ？

頼朝　いいね。お茶にしようか。

義経　やったー！　女たち、持ってこい！

女たちがお茶とお菓子を持ってくる。

義経 紅葉まんじゅうに、赤福、生八つ橋。  
頼朝 たくさんあるな。  
義経 平家を追いかけるその道中で、女たちに貢がれちゃって。  
女たち エル、オー、ブイ、イー！  
頼朝 モテモテだな。  
義経 こら、お茶は俺ちゃんが淹れる！

義経、頼朝にお茶を淹れる。  
頼朝、お茶を飲み、

うまいね。  
よかった。

義経、これ使いなさい。(ウエットティッシュを渡す)

ええ？ 別に、汚れてませんよ。

お腹壊すよ。

大丈夫ですって。(まんじゅうを掴んで頬張る)

まったく。

(もぐもぐしながら)きれいだなあ。

ときに義経。平家の様子はどうか。

(女に口を拭いてもらいながら)あいつら、現在は四国の讃岐で「うどんを食っております。道中こちらの味方もずいぶんやられたようです。いやいやご心配ご無用。窮鼠がたまたまネコを噛んだだけ。長くはもちません。」

自信があるか。

でへへへ。いやあ、俺ちゃんてば頼朝兄さんの出来のいい弟として評判ですから、兄さんの目指す源氏による武家社会のために、命だって捨てる覚悟。

作戦名は。

「ガンガンいこうぜ」

キヤー！

頼もしい、期待してるぞ。

でへへへ、お任せください！

梶原景時が入ってくる。

失礼いたします。

おお、景時。

ああ！ おじさんが、梶原景時かあ。景季に顔がそっくりだ。さすが親子(女たちと大笑い)

景時  
頼朝  
義経

頼朝  
義経  
女たち  
頼朝  
義経

頼朝  
義経

頼朝  
義経  
頼朝  
義経

頼朝  
義経

頼朝  
義経

頼朝

義経、敬語を使え。年上だ。

義経

兄さん！ 頼朝兄さん！ 俺ちゃんの上に立つのは兄さんただ一人。いくら兄さんの頼みでも、年上ってだけで敬語はちよつと、美学に反します。

女たち

えー、超かっこいいんだけど。

女たち

よしぴやばくない？よしぴ。

景時

なんだこのコンパニオンレディーたちは。

女たち

え、コンパニオンレデイとかウケる。

義経

この間の合戦で、敵に囲まれた自分の息子をわざわざ助けに行ったらしいじゃない。

景時

ええまあ。

義経

「梶原二度の駆け」なんつって巷じゃ深イイ話になってるみたいだけど、俺ちゃんに言わせりゃダサいの極み。弱けりゃ死ぬのがこの世のルール。

女たち

きやー！

景時

我々は兵器ではありません。たとえ戦場でも息子がピンチとあれば身を挺して助けに行くのが人間かと。

義経

時間と命の無駄。まったく、親子ともどもお笑い草だぜ。

女たち

草生えるんですけどー

景時

息子の景季は「義経特選隊」のメンバーでもある。あなたの部下を救ったことにもなるんですが。

義経

景季はチームから外した。親離れできないような貧弱な坊やに用はないね。

頼朝

やめる二人とも。まったくよく口の回る弟だ。

義経

口と頭が回ることにかけちゃあハンドスピナーが裸足で逃げるって評判なんで。

景時

「ガンガン行こうぜ」では兵は尽きるぞ。

義経

「いのちだいじに」じゃ勝てやしねえ。命の使い方ってやつを、みせてやるよ。舞台変わって、鶴越！

☆

鶴越（ひよどりごえ）。

高い崖の上から、平家軍を見下ろす義経と、「義経特選隊」

高綱

うわー、たけえ。こうしてみると、下にいる平家たち、まるでアリンコだ。

義経

自分の居場所を守るため、大群でぶつかり合う。それだけなら人もアリも戦術に大差ない。しかしアリには裏がかけない。

高綱

いやしかし、ほんとに高いっすよ。

義経

ぐふふふ、まさかこんな崖の上から攻めてくるとは誰も思うまい。

弁慶

そううまく行きますかね。

高綱

そういえば誰だお前は。

弁慶

新たに義経特選隊に加入いたしました、武蔵坊弁慶。

義経

作戦が不満か？

弁慶

作戦と言うほどのことでもございますまい。滑って死んでしまえばそれで済ませたいのまい。

高綱

ほんとの意味で高いですもん。自分、名前高綱ですけど、……高いっすね。

弁慶

成功する確証がおりますか。

義経

確証ねえ……いるか？ そんなもの。

高綱

いや……いるんじゃないすかね……

義経

ほしい？

高綱

ほ……い……か……な……？

弁慶

まず、人を乗せずに、馬だけ行かせてみるというのは。

義経

ああ、じゃあそれで。

高綱

かしこまりました。馬、カモン！

馬が二頭やってくる。

高綱

よく聞け、馬。今からお前たちに大事な任務を与える。この鶴越を、真つ逆さまに、勢いよく、超スピードで、下りてもらう。あ、いや、落ちてもらう。いいか、お前ら、絶対に死ぬなよ。もしお前ら馬が生き残ったら、次は俺たちが行くことになる。だから、絶対に死ぬなよ！

馬

ひひーん。

高綱

では、落ちろ！

馬たちが崖を落ちていく。

一匹の馬が足を滑らし、そのまま死ぬ。

馬

ひひーん！

高綱

あー、一匹残ったー（がつくり）

弁慶

なんまんだぶなんまんだぶ。

義経

馬の耳に念仏は不要だ弁慶。

高綱

どうでしょう、もう一回馬だけ落としません？

義経

さあさあみたか野郎ども、馬にできて、人にできないことがあるものか。敵の背中をとる絶好のチャンスだ。文字通り、命がけで落ちろ！俺ちゃんの後についてこい！

義経達、鶴越を真つ逆さまに落ちていく。

「義経ソング」

あおり

エルオーブイイー ラブミー義経  
エルオーブイイー ラブミー義経

義経

急な崖でも関係ないぜ 危険な方が面白いだろ  
もしも死んじやってもそれは自己責任  
弱いやつには興味ない

全員

カモンベイベー こっちからも遊びに行くぜ  
カモンベイベー 鴨川に fallin' down させてやろうか

(重衡登場。逃げようとするが囲まれる)

☆

平家の隠れ家。

宗盛と教経が沈鬱な表情でいる。

知盛はがつくりとうなだれている。

建礼門院がそろりと現れる。

建礼門院

うどん食べる人―…

誰も手を上げないので、

宗盛

あ、じゃあ…

建礼門院

他は？

誰も答えない。

建礼門院、ため息をついて出ていく。

教経

女は気楽でいい。

宗盛

…

教経

(知盛に) 元気出せ。お前にふさぎ込まれては会議が進まん。

教経、知盛に近づき、

教経

気持ちはわかるが、今考えなければいけないのは重衡のことだ。

知盛

いや大丈夫。…もう元気だ。まさにいま、元気になった。

宗盛

無理するな。



知盛 いやほんとに。だって当たり前のことだろ。イクサをしてるんだから。

宗盛 平気なはずないだろう。

知盛 平気でいられなきゃどうなんだ、狂えてのか。俺だって何人も殺してるんだ。息子が死んだくらいでへこんでられるか。

宗盛 知章……

みなで、客席の知章をちらっと見る。

建礼門院 うどん。(どんぶりを宗盛に渡す)

知盛 ……で、しげちゃんをどうするかだ。

宗盛 後白河院の要求は、しげちゃんと三種の神器と交換だと。

教経 ありえん。三種の神器があるからこそ、安徳天皇は天皇でいられるのだ。

建礼門院 陛下が天皇じゃなくなるかもしれないってこと？

教経 そんなことになれば、我々はいよいよ終わりだ。

建礼門院 ねえお兄ちゃん、そんなこと絶対にダメ。

宗盛 ……

(宗盛に) まさか、重衡の命が大切だ、なんていう気じゃないだろうな。

二位の尼が現れる。

二位尼 宗盛。

宗盛 母上。

二位尼 重衡を助けてあげて。

建礼門院 お母さまそれは、

二位尼 お前は黙って。

建礼門院 いくらお母さまとはいえ、口出しは、

二位尼 重衡は私がお腹を痛めて産んだの。

建礼門院 ここにいる誰もが、誰かのお腹を痛めて産まれてきたんです。

二位尼 誰かのことなど、どうでもいい。重衡は私の子ども。誰かじゃない、

私の子どものなの。平清盛の妻の子どもなのよ。

宗盛 気持ちわかります。

二位尼 戦って死んだのならばあきらめもつく。でもまだ重衡は生きているの。

教経 生け捕りにされるくらいなら死んだ方がましだった。

二位尼 ええ、そうよ。その通り。でも、生きてる！

建礼門院 ……三種の神器は絶対に渡せない。

二位尼 お前は自分の兄さんを見殺しにできるの。

建礼門院  
二位尼  
建礼門院  
知盛  
宗盛  
知盛

じゃあお母さまは陛下が天皇じゃなくなってもいいんですか！  
親に口答えしないの！  
あたしだって天皇の親よ！  
いい加減にしてくれ！  
ともちゃん。  
俺は最低の親だよ。

間。

知盛  
教経  
知盛  
教経  
知盛  
教経  
知盛  
教経  
二位尼  
知盛  
教経  
二位尼  
教経

俺にはね、知章が敵に追いつかれたのが、見えていた。  
もうやめろその話は。  
見えてた。けど、助けに行かなかった。助けに行けば俺もやられる  
と思った。  
当然だ。戦場では親も子もない。  
本当にそうか？  
なに？  
それがどこであれ、俺たちは、自分が人間であることを忘れちゃあ  
いけないんじゃないか。  
そうだよ。そうだよ知盛。  
かつて俺たちはNO平家NOヒューマン。平家でなければ人ではな  
いと言い放った。しかし今は。これが人間と言えるのか。  
人間でなくてもいい。強い平家を守るため、天皇陛下をお守りする  
ためなら、我々は人間を越えなければならぬ。  
人間を越える！ 人間を越えて何になるか。鬼ですか。  
鬼にもなるかと言ってるんだ！

沈黙。

建礼門院、うどんをすすす。

二位尼  
建礼門院  
宗盛  
教経  
宗盛

音を立てないで。  
うどんはこうやって食べるんです。  
我々は、陛下をお守りしなくてはいけない。  
そうだ。  
そして、できるだけ大勢の人間が助からなければならぬ。

間。

宗盛  
二位尼

三種の神器を渡しても、しげちゃんが無事に戻ってくるという保証  
はありません。  
そんな、

宗盛  
それに、後白河院からも見捨てられた今、我々のよりどころは安徳天皇しかないんです。平家を立て直し、再び都に返り咲くためにも、

二位尼  
都に帰れる日なんか来るのかしら。

宗盛  
母さん。

二位尼  
私たちはもうこのまま滅びていくんじゃないかしら。

宗盛  
なんてことをいうんですか。

二位尼  
だつたらせめて、重衡にもう一度会いたい。

宗盛  
母さん、僕が総大将です。僕の決定に従ってもらいます。

二位尼

宗盛  
重衡より三種の神器が大事？

大事です。

二位の尼、出ていく。

建礼門院

お母さま。

教経  
では、そのように。

教経、出ていく。

知盛  
宗盛。お前はいつか俺たちに、生きて帰ろうと言った。

宗盛  
ああ。

知盛  
重衡にもだ。

宗盛  
ああ。

知盛  
お前は軟弱だが、俺はそれでもいいと思っていた。お前の甘さが、誰かを救うこともあるだろうと思っていた。

宗盛  
何がしたい。

知盛  
お前は自分が生きていたいだけじゃないのか。

間。

宗盛  
平家全体のための決定だ。

知盛  
お前にとって平家とは誰だ。

あわじいとキツネを抱いた安徳天皇が入ってくる。

建礼門院

陛下。

あわじい  
すみません、先ほどお昼寝から目覚められました、

知盛、去る。

安徳天皇

こんな夢を見た。余は、イルカとなって仲間たちと海の中を泳いで

いた。

建礼門院

海の中には竜宮城がありましたか？

安徳天皇

そんなものはおとぎ話だ。海の底はただただ暗い。夢で見たからよ

く知っている。

建礼門院

さようでございますか。

あわじい

陛下は賢くていらっしやいますな。

宗盛

陛下、ご不便ばかりで申し訳ありません。必ず近いうちに、京の都

に帰れる日が来ます。

キツネ

ほんとかな。

安徳天皇

おかあさま、おなかがすいた。

建礼門院

なにかつくりましょう。お兄ちゃん、

宗盛

なんだ。

建礼門院

うどん、のびちゃったでしょ。作り直すよ。

宗盛

いや、これでいい。

建礼門院

おいしくないよ。

宗盛

いいから、早く陛下に。

建礼門院

……。陛下、行きましょう。

安徳天皇、建礼門院に連れられて去る。

あわじい

あまり、無理なされませぬよう。

宗盛

あわじい。

あわじい

は。

宗盛

ともちゃんについてやってくれないか。

あわじい

ああ……。承知いたしました。おや、キツネが。

キツネだけ戻ってくる。

宗盛

陛下の手からすり抜けたか。

あわじい

るーるるー

キツネ

それなんなの？

あわじい

来ませんな。

キツネ

行かないよ。

宗盛

ニンゲンちゃん

キツネ

コンコン。

宗盛

ケモノはいいなあ。

キツネ

いやー、そうでもないっすよ。

宗盛

安徳さまのこと、よろしく頼むぞ。

キツネ

よろしくって？

宗盛

お前、化けれるのか？

キツネ  
あわじい

宗盛

うわなにそれ、伏線？  
ケモノに何を言っても無駄でございますよ。  
ほら、行くぞ。

キツネ、宗盛の腕におさまる。

あわじい

おや、扱いが上手ですな。

宗盛

よしよしよし。

宗盛、キツネを抱いて、去る。

☆

頼朝の館。

梶原景時によつて、平重衡が縄打たれて連れて来られる。

景時

頼朝さま。平重衡を、連れてまいりました。

頼朝

こんにちは。

重衡

こんにちは。

頼朝

いいね。

重衡

なにがでしようか。

頼朝

生け捕られた今の気分は？

重衡

え？

頼朝

今の気分。

重衡

…金魚すくいの金魚の気持ち、ですかね。

頼朝

その包帯は？

重衡

ご存知でしょう。

頼朝

あー！ 大仏を焼いた時の。

重衡

はい。

頼朝

あれからずいぶん経つのにねえ。

重衡

そうですね。

頼朝

あれは、清盛公の指示か？

重衡

父ではない。

頼朝

ではお前が？

重衡

とんでもない。あれは、事故だったのだ。

頼朝

ふうん。…まあ、事故でなければ困るよ。人間のすることとは思

景時

えないから。

重衡

はたから見ていますと、あの大火災から、平家の皆さんは落ちぶれ

頼朝

始めたように思いますな。

重衡

頼朝殿。

頼朝

なんだ。

重衡 重衡  
なぜ私をだらだらと生かしておくのだ。さっさと首をはねてくれ。  
いやー、意識の高い発言、さすが平家だ。しかしさっさとというわけにはいかない。お前は今、取引材料なのだ。

重衡 取引？

重衡 平家に使いを出した。お前の命と、三種の神器を交換したいと。

重衡 ……

重衡 重衡  
きけば総大将平宗盛は、一族郎党への愛情が特別にあつい男だと聞いている。

重衡 私の命にそこまでの価値はない。

重衡 重衡  
仲良しブラザーズと聞いているぞ？ お兄ちゃんが助けてくれるって。

義経が現れる。

義経 義経  
兄さん。平家側から返事が届きましたよ。

重衡 重衡  
いやあよかったな重衡。これでお前は晴れて自由の身だ。

重衡 重衡  
そんなはずはない。

重衡 重衡  
大丈夫だって。義経、手紙を読んでくれ。情感たっぷりだ。

重衡 重衡  
ええ……「我々平家は、長きにわたり朝廷への忠義を果たしてきた。その働きについては、後白河院もご存じのはずだ。一方、源頼朝は命を助けてもらった恩を忘れ、平家に牙をむくとんでもない恥知らず。ゲス野郎。ごみむし。メクラチビゴミムシ。ズンドウメクラチビゴミムシ。カブトムシ。三種の神器が欲しいのならば、おそれおおいことながら後白河院自ら西へおいでいただき、ともに源氏を討つとお約束していただきました。もしそれが出来ないと言うのなら、我々は三種の神器を持って、このままインドにでも中国にでも行ってしましましょう。神武天皇以来長きにわたって我が国の宝であった三種の神器が、ついにむなしく異国の宝となってしまう。どうぞ後白河院によりしくお伝えください。平宗盛。」

重衡 重衡  
重衡よ。

重衡 ……

重衡 重衡  
かわいそうに。

重衡 重衡  
というわけで交渉決裂。義経、重衡の身柄を、奈良のヤンキー坊主どもに引き渡せ。

重衡 重衡  
奈良のヤンキー坊主？

重衡 重衡  
大仏燃やされ仲間を焼かれ、お前を百回火あぶりにしてもあぶりたらない奴らだ。

重衡 ……

重衡 重衡  
怖いか。

重衡 重衡  
頼みがある。

頼朝  
重衡  
頼朝  
重衡  
頼朝  
義経  
頼朝

なんだ。  
出家をさせてくれ。

ダメだ。

頼む。

頭を丸めたくらいで何になる。

地獄が怖いのだ。

（ふっと笑って）ダメだ。連れて行け。

血のつながった兄弟にも助けてもらえないなんてね。

早く連れて行け。

義経に引つ立てられ、重衡、連れていかれる。

景時

交渉決裂となりますと、  
分かっている。

頼朝

ご安心ください。必ずや、平家を根絶やしにしてみせましょう。

頼朝

うん。義経と行ってくれ。

景時

…はばかりながら頼朝さま、

頼朝

嫌いなのは分かっている。

景時

いえけして嫌いとかではないです。

頼朝

好きではないだろ？

景時

それをきいてどうするおつもりですか。

頼朝

別に。

景時

…平家からの手紙を読む義経殿、まーなんといいいますか、随分と

頼朝

イキイキしてらっしゃいましたなあ。

景時

そうか？

頼朝

頼朝さまを虫呼ばわりするくだりなど、本当にそんなことが手紙に

景時

書いてあるのかと、中を覗き見たい衝動にかられました。

頼朝

景時。

景時

はい。

頼朝

うちの弟をあんまり悪く言うな。

景時

これは失礼いたしました。

頼朝

行け。

景時

は。

☆

維盛の妻が、平家陣営を訪ねる。

すみませーん。あの、すみませーん。

維盛妻

二位の尼が出てくる。

二位尼 はい。  
維盛妻 二位の尼さま。  
二位尼 あなたは維盛の。  
維盛妻 ご無沙汰しております。随分お痩せに、  
二位尼 あなたこそ。  
維盛妻 はい。  
二位尼 子どもたちは元気？  
維盛妻 なんとか。  
二位尼 そう。維盛に呼ばれて？  
維盛妻 いえ、そういうわけでは  
二位尼 あらそう……

あわじい が駆け込んでくる。

あわじい おお！ 維盛坊ちやまの奥様ではございませんか。お久しぶりでございませう。

二位尼 あわじい、どうだった？  
あわじい ええ、こちらはダメでございました。奥様、維盛坊ちやまからなにか連絡がございましたか？

維盛妻 いえ、あの、どういうことですか？  
あわじい 実は、お姿が今朝から見えないのです。  
維盛妻 ええ？

教経、現れる。

教経 いないな。

あわじい そちらもダメでしたか。

教経 日の出る前にこっそり出たのだろうな。（維盛妻に気付き）誰が呼んだ？

維盛妻 いえ、誰にも。

教経 では自分から？

維盛妻 はい。

教経 維盛から手紙は？

維盛妻 いいえ。

教経 連絡は？ なにもなしか？

維盛妻 なにもなしです。だから来たんです。

教経 どこに消えたか心当たりはないのか。

維盛妻 あれば、そちらに向かっています。

教経 ……確かにな。



維盛妻

教経

：：あの、主人は、  
裏切ったかもしれん。

維盛妻

まさか。

教経

わしははじめから信用などしていなかった。

あわじい

奥様の前ですぞ。

教経

ああいう臆病者に限って、ゆれる天秤の上を飛び歩くのが得意だ。

二位尼

裏切ったと決まったわけではないわ。

教経

ではなぜ消えたのだ。たった一人敵地に忍び込み、義経の首を搔こ

あわじい

うとでも？ そんなことをする男か？  
あ、坊ちやま方！

知盛、宗盛現れる。

知盛、驚いた顔で維盛の妻に近づく。

知盛

なぜいる。

あわじい

こちら維盛坊ちやまの。

知盛

わかってる。

維盛妻

：：主人に会ったのですね。

間

知盛

ああ。

教経

なんだと。

維盛妻

何か言ってみましたか。

知盛

：：家族に一目会いたかったと。

維盛妻

そうですか。

宗盛

僕たちが見つけたときには、もう船は沖の方まで出ていて、風に乗

って、ちゃんこれの声だけが聞こえてきました。こちらの声はあま

り聞こえていないようでした。

維盛妻

そうしてお二人は、主人が身を投げるまで、じっと見ていたという

のですか。

宗盛

そう見えるか。

維盛妻

いいえ。だって、お二人ともずぶぬれですもの。

間。

宗盛

たもとに石でも入れていたのか、ちゃんこれはすぐに沈んでしま

いました。

二位尼

ではもう海の底なのね。

維盛妻

：：情けない。いくさで死ぬならまだしも、身投げなど男のする

宗盛  
維盛妻

宗盛

とじゃありません。

奥さん、ちゃんこれは、  
帰ります。こんなことなら来なければよかった。風の便りのうわさ  
なら、もう少し美化されて届いたでしょうから。失礼します。  
あの、これ。

宗盛、手紙を差し出す。

維盛妻

宗盛

それは

船に残っていました。

維盛妻

船まで泳がれたのですか。

宗盛

なにかないかと。

維盛妻

読んで頂けませんか。

宗盛

ルールなきこの世に唯一あるルール  
生まれたものは死なねばならない

維盛妻、手紙を奪い取り、おじぎをして、去る。

宗盛

…風が出てきたな。

☆

暴風雨。

義経と景時。

弁慶が入ってくる。

弁慶

風が強くなつてまいりましたな。

景時

もう休みましょう。

義経

なぜだ景時。

景時

この天気では船が出せません。休めるときに休まなくては。

義経

船が出せない？ そうかなあ。弁慶、どう思う。

弁慶

ご自分で確かめてみては

義経、外に出る。

弁慶

そうイライラせず。

景時

別に。

義経、戻ってくる。

義経

(爆笑しながら) やー、すごい風！



景時

バカ？

義経

さっきからお前なんだよ。兄さんに言うぞ。

景時

こっちのセリフだよ！ 船動かしてたらバツクすることもあるでしょう。

義経

ないって。なんかそういう、逃げる準備とかしたくないから。

景時

違う違う逃げる準備とかじゃなくて、標準装備。

義経

なんか……あいいれんなあ……

景時

それにね、整備も終わってない、風も強い、そんな状態で水夫が船

義経

を出すわけないでしょ。

景時

ええー……

義経

もういいもういい、行くから。君はさ、バツクギアつけてからゆっ

くり来たらしいよ。ま、そのときには、すでに勝負はついていると思

いますけどね。

景時

……

義経

じゃ。

義経と弁慶、去る。

景時

……誰だ。

ワスレガタミ、現れる。

ワスレガタミ

ちよりーす。

景時

お前か。

ワスレガタミ

なんすかなんすかー？

景時

なにしてんだここで。

ワスレガタミ

いやー、大変すなー。俺っちは、景時さんの味方ですから、そこん

景時

とこ、しくよるで。

ワスレガタミ

あっちにペタペタこっちにペタペタ。

景時

あ、悪口？ 悪口っすか？

ワスレガタミ

情けなくなんない？

景時

俺っちはただ、生きるためにカードを切っただけなんです。

ワスレガタミ

忘れ形見と言うカードか。

景時

それだけじゃ、弱いかなと。

ふうん……

☆

源頼朝と平宗盛による、記者会見。

琵琶法師

ベンベンベンベン……

頼朝

静粛に静粛に！ この世で最も気高く尊いお方、後白河院のご英断により、ながらくこの都において空席だった天皇の椅子に、後鳥羽天皇がお座りになることとなった。

宗盛

いくら後白河院とはいえ、三種の神器を軽んじることなどできないはずです。後鳥羽天皇の即位はあくまでも仮、こちらにおわします安徳天皇こそ、この国の正式な天皇です。

頼朝

もちろん後白河院も神器を軽んじているわけではない。だからこそ我々は、三種の神器奪還に向けて最終決戦を行うことをここに宣言する。

宗盛

この戦いに勝利することで、再び平家がこの国のイシズエとなりましょう。

頼朝

決戦の地は？

宗盛

壇ノ浦。

☆

舞台は壇ノ浦。

中央の船に、二位の尼、建礼門院、安徳天皇、宗盛が乗っている。

知盛が来る。

知盛

むねちゃん、ちよっと。

宗盛

ん？

知盛

あわじいを知らないか？

宗盛

いや。こっちは来てない。

知盛

そうか。

宗盛

ともちゃんと一緒だと。

知盛

昨日、陛下たちを船に乗せたときまでは一緒だった。

宗盛

捕まっつてなきやいいけど。

義経が拡声器でがなる。

義経

えー、平家諸君。君たちは完全に包囲されている。

知盛

三種の神器は。

宗盛

陛下と一緒にだ。

義経

おとなしく、三種の神器をこちらに引き渡したまい。

安徳天皇

お母さま

建礼門院

大丈夫です。陛下がこんなぼろ船にのってるなんて誰も思いません。

義経

えー、都には新しい天皇がね、もういるわけだ。意地を張るだけね、

無駄じゃないかと。みんなもそう思わんか！

民衆たち、大騒ぎ。

義経 君たちに正義はない！ 正義と書いて、勝ち目がない！

義経の隣に弁慶が現れる。

義経 どうだ？

弁慶 船が見つかりません。

義経 ああ？ なにやっつてんだよグズ。

弁慶 なにぶん、フナイクサに慣れていないものが多く。

義経 三種の神器を持って帰らんと兄さんに殺されるぞ。血はいくら流し

てもいい。探せ！

弁慶 かしこまりました。

弁慶、去る。

二位尼 陛下、そういえばケモノは？

安徳天皇 ニンゲンちゃんか？

二位尼 ええ。

安徳天皇 どこかに行ってしまった。

二位尼 ケモノはケモノね。

安徳天皇 あ！ イルカ！

イルカの群れが、客席からやってくる。

民衆たち、テンションが上がる。

二位尼 なんだかいやな感じがするわ。

建礼門院 気のせいですよ。

二位尼 薄気味悪いのよ。

建礼門院 ただのイルカです。

二位尼 でも、イルカなんて。

じゃあこうしましょう。あのイルカたちが、この船の周りを踊りながらぐるぐる回ったら平家の負け、それ以外だったら平家の勝ちです。これならどうです？

言い終わらないうちに、イルカ、船の周りを踊りながらグルグル回りだす。

二位尼  
建礼門院  
二位尼

徳子。  
ただのイルカです。  
都に帰りたいわ。

景時、現れる。

景時  
義経  
景時  
義経  
景時

あれー？ まだ決着ついてないんですか？  
遅れて来といて偉そうに。  
相手の駒をいくら減らしても、王手をかけなきゃ勝負はつかない。  
お前ごときにできるといいうのか。  
平家のみなさん！ あちらをごらんください！

あわじいが見れる。

知盛  
景時  
知盛  
義経  
宗盛  
知盛  
宗盛  
知盛  
宗盛  
知盛  
宗盛  
知盛  
宗盛  
知盛  
宗盛  
知盛  
義経  
あわじい  
義経

あわじい。  
さっしておやんなさい。  
あわじい、そこでなにをしている。  
お前、いつのまに。  
本意ではないはずだ、きっと、脅され仕方なく、  
あわじい、降りてこい！ 今すぐ殺してやる！  
やめるともちゃん！  
なんとも思わないのか！ 骨の髄まで信じた家臣のあの姿を見て！  
そりゃ、お前、僕だって、  
あわじい！ 殺してやるから来いと言ってるんだ！  
もう無理だ。  
ああ！？  
もう何もかもおしまいだ！  
この、愚将め……  
おいじじい！ 三種の神器はどの船にある。  
……  
指をさせ。

あわじい、ゆっくりと船を指さす。  
二位の尼、たちあがり、歌う。

「滅びのうた」

二位尼  
民衆たち

祇園精舎の鐘の声 私には響かない  
沙羅双樹の花の色 私には語らない  
祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり

二位尼

沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす  
はいつくばって 目を凝らし 大海原の底を見れば  
なにやら 憂い 怒り 悲しみのない 素晴らしい世界がある  
ふと 顔を上げ 我が国を見れば  
ケモノたちが肉を食い合うような なまぐさい風  
おごれるものは久しからず ただ春の夜の夢のごとし  
波の下にも 都があれば 私はそこで生きていきたい  
波の下にも 都があれば あなたとそこで生きていきたい  
幾千の屍の上を 風は吹く慰めもせずに

民衆たち

二位尼

民衆たち

歌い終えるとともに、二位の尼と安徳天皇、入水。  
義経たちはいなくなっている。  
教経が現れる。

教経

終わりだな。

宗盛

ああ……

教経

イクサも我々も。終わりだ。

宗盛

……

教経

宗盛、総大将としての責任をとれ。

宗盛

はあ……

教経

しっかりしろ！ お前の死に方で、のちの評価が決まる。

宗盛

評価？ なんですそれ。

教経

お前が好きな、世間の評価だ。

誰かが飛び込む音。

民衆たち、騒ぐ。

宗盛

これが責任の取り方なのか。

知盛

ああ。

宗盛

死にざまを見せつけ、あいつらのお楽しみになるのか？

知盛

そういうものだ。

宗盛

そういうものだ？

知盛

ああ。

誰かが飛び込む音。

宗盛

……ともちゃんは？

知盛

生きている理由がもうない。

建礼門院

お兄ちゃん。

知盛

なんだ。



建礼門院

死ぬなら連れてって。

宗盛

何を言ってるんだ徳子。

建礼門院

生きるのも死ぬのも、一人ではいや。

宗盛

だめだだめだだめだ！

知盛

見るべきものは、見た。あとはもう、見たくないものばかりだ。

誰かが飛び込む音。

民衆たち、騒ぐ。

宗盛

人が死ぬのがそんなに楽しいか！ 何が悪かったと言うのだ。何を  
してこなかったというのだ。この国のために、お前たちのようなも  
ののために！ 僕は必死に生きたじゃないか！

民衆たち、じつと宗盛を見ている。

誰かが飛び込む音。

宗盛

誰も死ぬな…：みんな生きろ…：誰も死ぬな…：みんな生きろ…：  
平家のためじゃない。お前たちのためでもない。そういうもの、だ  
と？ そういうものなど知るか！ 生きていたい。生きていたい。  
生きていたい。生きていたい。

宗盛が、海に落ちる音が響き渡る。

☆

それを、景時と頼朝が見ている。

三種の神器は。

今、必死に義経が海をさらっております。

まったく、下手に追い詰めるから

そのとおりでございます。そうでなくても義経は危険人物、

景時。

は。

わかっている。

頼朝

民衆たち、大歓声。

宗盛が海からあがってきたのだ。

宗盛、息を切らせながらも、立ち上がる。

民衆たち、静かに、ベンベン、と語り始める。

宗盛

勝手気ままに語りだしたな、琵琶法師ども。お前たちには、誰が

の国の総大将かなんて、どうでもいいことか。僕たちが泣いたり怒ったりすることは、お前たちには、お目汚しかお耳汚しに過ぎないのか。今すぐそこに行つて、お前たちの目をえぐり、耳をそぎ落としてやりたい。それでもお前たちは口を動かし続けるだろう。そしてさぞかし、面白い話をするんだろうな。

民衆たちがベンベン言いながら去る中、波の音が大きくなつていく。

☆

義経と弁慶。

壇ノ浦から鎌倉まで宗盛を護送したが、景時の讒言により頼朝の怒りを買ひ、頼朝と会えずにいる。

なぜ兄さんは会つてくれないんだ。

お怒りになつていてるか。

お怒り？ なぜ。壇ノ浦の合戦に勝利したのは、百パー俺ちゃんののおかげじゃないか。

ええまあ。

…景時だ。

でしような。

なぜだ。あいつに何かしたか？

したんでしような。

思い当たる節がない。

本当に？

ああ。

そういうところでしょうな。

ああ？

…

なんだ。

いえ。

せっかく鎌倉まで来たと言うのに、宗盛だけ引き渡せなんて手紙でも書いてみたらどうです。

そんなこととづくにやった。しかし返事がない。

逃げる準備をした方がいいでしょうな。

逃げる？

やるとなつたらあの方は、弟だろうと容赦はされますまい。

一目会えれば誤解は解ける。

景時が現れる。

景時

宗盛の処分が決まった。

義経

景時キサマ、

景時

頼朝さまからの伝言だぞ心して聞け！

義経

…

景時

宗盛は京都に送る。とはいえ、適当なところで首を切っておけ。行つてこいで大変だろうが、頼朝さまがお前をご使命だ。立派に果たせ。

義経

兄さんに会わせろ。

景時

会いたくないと言ってるんだから仕方ないじゃないか。

弁慶

宗盛を処分したら、次は我々ですかな。

景時

さあ。私が決めることじゃないから。

景時、去る。

☆

義経と弁慶、そして宗盛。

旅の途中、川のそばで休憩している。

いい天気だ。

（川の水を飲み）うまい。

義経。

なんだ。

なんとか命だけは助けてもらえないだろうか。

しつこいぞ。

だって。

だってじゃない。

せつかく生き残ったんだぜ。

そのことを恥に思えよ。

なんでだよ。

普通はあそこで死ぬんだよ！

お前だって生き残ってんじゃねえかよ。

はあ？

ああ？

勝ったの。負けたの。

それがどうした。

…話にならない、もう。

間。

宗盛

どうせ都まではいかないんだろ。

弁慶

は。

宗盛

この辺で殺すんだろ。

弁慶

ま、予定では。

宗盛

誰も見てないしき、殺したってことにしてき、

弁慶

生きたがりますな。

宗盛

そりやそうだよ。

弁慶

この先、いいことなんかありませんよ。

宗盛

ええ？

弁慶

無様に生き残った愚将として、嘲り笑われるだけ。

義経

そうだそうだ。

宗盛

それでも、いいじゃないか。こんな天気の良い日に、川のせせらぎに耳を潤す。たったそれだけのことも、死んだら出来ないんだぞ。

沈黙。

義経

お前の処分が終わったら、次は俺ちゃんだ。

宗盛

え？

義経

兄さんに殺される。

宗盛

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

義経

あんなに頑張ったのにな。

宗盛

：：

義経

死んでも構わないと思ってたんだ。兄さんのためなら。

宗盛

どうりで恐ろしかったわけだ。

義経

だろ。

宗盛

今はどうなんだ。

義経

え？

宗盛

死んでも構わないのか。

沈黙。

義経

なんで死ななきやならんのだ。この俺ちゃんが。義経だぞ。日本人

ならみんな大好き、源義経だ。

宗盛

(笑う) 誰も、お前のことなんか好きじゃねえよ。

義経

バカ、お前よりは愛されてるわ。

宗盛

そうかね。

義経

そうだよ。

宗盛

こんな死にたがりか？

義経

うるせえ死にぞこない。

宗盛

お前は生きぞこないだろうが。

義経

そういうお前は生きたがりだよ。

沈黙。

義経  
宗盛

生きてえなあ……  
生きてえよな。

宗盛、そつと手を差し出す。

義経、その手をつなぐ。

お互いに、相手を抱きしめる。

すると、景時が突然お客さんに話し出す。

景時

さてみなさん、歴史の上では、ここで宗盛は首を切られ、京の都に晒されます。そして、義経はその後、兄、頼朝に追われ、殺されてしまいます。しかしみなさん、せめてお芝居の中くらい、事実よりも、情けが優先される。そんなことがあってもいいじゃない、事実よりか。ここで私は、建礼門院徳子を、宗盛恩赦を知らせるメッセンジャーとして、登場させたいと思います。

☆

徳子が、安徳天皇を連れて現れる。

建礼門院

おにいちゃん！

弁慶

あ、あれは、

宗盛

徳子！

建礼門院

あーよかった、まだ生きてた。

宗盛

お前こそ。

建礼門院

うん、なんか助かった。

安徳天皇

間一髪じゃったの。

宗盛

へ、陛下！

義経

壇ノ浦に沈んだはずでは！

安徳天皇

あれは、ニンゲンちゃんじゃ。

宗盛

なんと！では、入れ替わっていたのですか。

安徳天皇

うむ。

宗盛

ははー……

建礼門院

そんなことよりお兄ちゃん、恩赦よ恩赦。

宗盛

恩赦？

建礼門院

後白河院が、お兄ちゃんのこと許してくれるんだって。

三人

えええ？

建礼門院

おまけに、土地もお金もいっぱいくれるって。なんでかわかんない

けど。

宗盛  
義経  
建礼門院  
弁慶  
安徳天皇  
義経  
安徳天皇  
義経  
安徳天皇

なんかわからんけどやったー。  
ちよ、ちよっと待て。つまりもう俺ちゃんは、こいつを切らなくていいんだな。  
もちろんよ！  
よかったですな。  
それから義経。お前には船をやるう。  
船ですか。  
うむ。それに乗って、モンゴルとかに行くがよい。  
モンゴル、ってどこですか？  
海に向こうじゃ。そこで、チンギスハンとかになればよい。  
やったー。チンギスハンになるぞー

宗盛、義経、困惑のまま、舞台はハッピーエンドに着地する。

### 「関門オペラ」

三文オペラの主人公　いかしたなうてのメツキースは  
いろいろわるさもしたけれど　なんやかんやで助かった  
だったらこんなに生きたいと　生き恥晒して願うなら  
なんとか助けてやりたいと思うのが人情

三文の　値打ちもなくても

関門の　海には沈みたくない

三文の　値打ちもなくても

関門の　海には沈みたくないよ　あーあ　それが人の子

金持ちも貧乏も平家も源氏も　人として生まれたら

結末はみな同じ　だったら　せめて　死ぬまで生きよう

三文の　値打ちもなくても

関門の　海には沈みたくない

三文の　値打ちもなくても

関門の　海には沈みたくないよ　あーあ　それが人の子

あーあ　それが人の子　あーあ　それが人の子

幕。

この作品は「平家物語」を下敷きにしています。

また、ブレヒト作「三文オペラ」のオチを参考にしています。